

歴史を歩く 23

『戦国時代の群像』

第八話 肝付兼統の台頭



天文8年(1539年)に新納氏が失脚をすると、新納領は、櫛間城主島津忠朝、都城城主北郷忠相、高山城主肝付兼統の三者で分割されることとなった。北郷忠相は財部のほか梅北の代地として三俣院高城を得て、この場所を新たな本拠地とした。島津忠朝は、新納氏を追放した志布志城に移り、その長男で豊州島津家第4代当主となる島津忠広が、救仁院、末吉、松山を領した。そして、救仁郷の地は肝付兼統の領する所となった。

薩摩半島では、天文2年(1533年)の、日置の南郷城攻めを皮切りに、島津忠良・貴久父子による島津実久への反撃が始まっていた。天文5年(1536年)に忠良・貴久父子は実久に奪われていた

伊集院城を奪還し、翌年鹿児島へと進撃し、天文7年(1538年)から翌年にかけて、南薩における実久方の最大拠点である加世田城を攻め落とした。新納氏が島津忠良に支援を求めたのは、ちょうどこの頃であった。当然ながら、大隅半島における新納氏の危機を救うべく援軍を差し向ける余裕はなかった。その後、忠良・貴久は紫原での最終決戦を制し、市来鶴丸城の戦いにおいて、実久の弟・忠辰を討つと、実久はついに降伏し、名実ともに島津貴久は薩摩・大隅・日向三州の守護職となったのである。

しかしながら、貴久が薩摩半島を制して、守護職になったとしても、大隅(現在の始良市から大隅半島にかけての範囲)は、古くからの領主が多く、それぞれの領土で勢力を堅持していたため、実質守護の支配権が及ば

ないところであった。忠良・貴久にとっては、大隅・日向における実質的な支配が次の課題となった。そのような中、大隅半島において実久を支持していたはずの肝付兼統が、突然貴久を支持する動きを見せる。必然的に兼統は、新納氏と同様、周囲の諸豪族の中で孤立することとなった。

天文11年(1542年)2月1日、兼統は実久方の禰寝(ねじめ)氏を牽制するため、和睦の証として禰寝清年に譲り与えていた高隈城と百引の平房城を奪い返した。ところが、同年に実久党による肝付攻撃も始まった。飢肥城主島津忠広は兼統の属城であった救仁郷の蓬原城(志布志市有明町)への攻撃を開始したのである。さらに、この時忠広は北郷忠相に援助を求め、これに対して忠相は二男の忠孝を援軍に送り込んだ。忠孝は鹿屋まで押し寄せ、兼統の救仁郷への援路を阻んだ。そのため蓬原から大崎にかけては、島津忠広の攻略にさらされる結果となった。

忠広の本拠地である飢肥の地が手薄になっているところを衝いて、天文12年(1543年)に日向の伊東義祐が侵攻してきた。忠広はこれに対処しなければならぬ事態となり、これによつて形成は逆転し、肝付兼統は大隅半島における勢力拡大の機会を得ることになったのである。天文13年(1544年)には大崎城を奪還し、島津忠広領の救仁院の安楽を占領した。ここに至って、伊東義祐の圧力と肝付兼統の台頭に苦しんだ島津忠広と北郷忠相は、伊集院城にて島津貴久と面会し、貴久を守護職として仰ぐことを誓った。天文14年(1545年)の

ことである。一方、この頃肝付兼統は、島津忠広の領地であった市成(鹿屋市輝北)を与えられ、天文15年(1546年)には大始良(鹿屋市)を領することとなった。そして忠広に奪われていた蓬原も取り戻した。さらに天文17年(1548年)には恒吉(曾於市大隅)と、牛根・辺田・二川(垂水市)を領することとなった。

こうして、次第に兼統は肝付家最大の勢力を構築し、「大隅の雄」としての頭角を現していったのである。この時38才であった。(大崎町教育委員会内村憲和)



▲肝付氏勢力図(1548年頃)